

## &lt;前回&gt;オリエンテーション

## 1. 近代の思想状況と自然神学

## 2. 自然神学の新しい動向

## 2-1: 自然神学とコミュニケーション合理性

(1) 宗教と科学の関係論とキリスト教思想史 5/28

(2) 宗教と科学の共通課題と自然神学 6/4

(3) 自然神学とコミュニケーション合理性 6/11

## 2-2: クレイトンと脳神経科学 6/25

## 2-3: マクグラスと伝統特殊的合理性、意味論 7/2

## 3. 形而上学批判と形而上学再構築

## 3-1: ハイデッガーと解釈学 7/9, 7/16

## 3-2: ホワイトヘッドとプロセス神学 7/23

**Exkur:** 人文学の新しい可能性。科学技術の神学にむけて。

## &lt;前回&gt; Exkurs: 科学技術の神学にむけて—現代キリスト教思想の文脈より—

## (1) はじめに

1. 問題状況: 問いとしての科学技術、あるいは「科学技術の神学」の構築の課題

2. 「キリスト教」、「科学技術」の多様性をどのように扱うか。

・聖書テキストから、キリスト教の基本教義を基礎にして

・人間存在から科学技術へ（科学技術は人間の営みである）

## (2) 人間存在から科学技術へ

3. 聖書の創造物語と存在論あるいは人間学という二つの軸を設定し、両者を繋ぐ。

4. 聖書の創造物語

↓

①神の像／支配（創世記1章）、②土の塵／耕す／命名（創世記2章）、③墮罪（創世記三章）：①と②は、人間存在の有限性、その中で、①は人間存在の善性（伝統的に「創造の善性」）を意味し、②はその善性において成り立つ人間の行為。

土を「耕す」（創世記2章15節）が「技術」に関連し、「命名」（創世記2章19節）が「科学」に直結する人間の行為である。→科学技術の原型というべき営み（世界の事象に名を与え、世界の事象を変化させる行為）→聖書の人間理解に従えば、科学技術は人間にとって偶然的なものではなく、人間存在の本質に属する。人間は本来、耕す存在者、つまり「農民」である。

5. ③: 善なる本質の歪曲＝疎外

↓

人間存在: 本質存在と実存存在という二つの規定によって論じる伝統的な存在論的思惟は、聖書の人間理解の哲学的解釈。

6. テイリッヒ: 有限性と疎外、本質と実存との二重性→人間的生（＝人間の現実存在）の両義性（ambiguity）。

↓

人間は善と悪の混合体。原発は悪、i P S細胞は善といった議論は可能か、あるいは原子力について兵器と平和利用の分離・区別は可能か。

7. 科学技術の光の側面:

耕す人（農民）である原初の人アダムに科学技術の原型を見ることができる。とすれば、

科学技術とは、世界創造の始めから人間存在に備わっていた営みであり、本来人間の善性に属する。これは、科学技術に基づく人類の文明がそれ自体としては神の肯定の下にあることを意味する。

8. 科学技術の影の側面：聖書における文明批判、その前提としての聖書における墮落物語。しかし、人間存在の影の側面と科学技術との関わりを精密に論じるためには、人間存在の存在論的考察に加えて、歴史的パースペクティブを導入することが必要になる。

9. キリスト教と環境危機との関わりを論じる際に不可欠の手続き。

芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年、第7章。

10. 近代以前と近代以降との間に生じた科学技術の質的变化。

人間存在の両義性における疎外・歪曲の構造的に規定されてはいるが、近代になって顕在化、まさに 20 世紀、劇的な仕方で前面化する。核技術と遺伝子工学。

11. ハンナ・アーレント『人間の条件』

「一九五七年、人間が作った地球生まれのある物体が宇宙めがけて打ち上げられた。この物体は数週間、地球の周囲を廻った。」(アーレント、1994、9)

スプートニク一号の成功が「重要性からいえば、もう一つの出来事、核分裂にも劣らぬ」(同所)事件であるとした上で、その意義・問題性を、「人間の条件」との関わりで論じている。

「人間の条件」を 20 世紀の科学技術は大きく変容させようとしている。

12. ティリッヒ『宗教の未来』所収の講義「宇宙探検が人間の条件と態様に対して与えた影響」。「宇宙探検が人間そのものに与える影響」と「宇宙探検が人間の自己理解に与える影響」(ティリッヒ、1999、42)とをテーマ化。

宇宙探検はルネサンスから啓蒙主義に至る「水平線の発見」(=神や人への奉仕のわざにおいてコスモスを支配し変革しようとする傾向)あるいは「円環と垂直線に対する水平線の勝利」と特徴づけられる近代特有の精神動向に属しており、「十九世紀的な世界的進歩への信仰」はこの線上に位置づけられねばならない。

13. 「大地の非神秘化」の徹底化。原子力技術は、自然界に安定的には存在しない元素を生み出し「外となる自然」の改変を可能にし、遺伝子工学は人間の「内なる自然」の改変を理論的に可能にした＝「人間の条件」の改変のプロセス。

14. 現代文明の不安。両義性の不安の徹底化。

「人間の不安感は、詩篇第八篇の時代以来、支配する力の中で自尊心とバランスをとっていたのだが、支配する力の増加とともにかえって増加してきたのである」(同書、四九)

神の祝福としての創造の善性を喪失する危機＝人間が人間でなくなる危険。

15. 科学技術の批判的監視者としての役割。

このためには、科学技術に根本的に規定された文明全体を視野に入れることが必要。

科学技術に対するキリスト教的な批判的な眼差しは、科学技術の社会批判(政治と経済)において具体化されねばならない。

16. エリユール(Jacques Ellul, 1912-1994)の一九五四年の『技術社会』上下巻、すぐ書房。(La technique ou l'enjeu du siècle, Economica, 1990(1954).)

・栗林輝夫(関西学院大学)「原子力の神学——エリユールとティヤール・ド・シャールダンを対比して」(日本基督教会近畿支部会、2013年3月12日、神戸国際大学における研究発表)。

・松谷邦英『技術社会を〈超えて〉——ジャック・エリユールの社会哲学』晃洋書房、2010年。

**(3) キリスト教思想にとって科学技術とは何か****(4) むすび**

26. 科学技術の両義性とそれに対するキリスト教神学の応答・役割の両義性。

最終判断の終末論的留保。

一ノ瀬正樹の言う「不可断定性」。

一ノ瀬正樹『放射能問題に立ち向かう哲学』筑摩書房、2013 年、特に第 10 章 (209-223 頁)。

**2. 自然神学の新しい動向****2-1 : 自然神学とコミュニケーション合理性****(1) 宗教と科学の関係論とキリスト教思想史**

1. 問題：キリスト教思想の問いとしての科学技術

→ キリスト教思想における科学技術論（「宗教と科学」関係論に基づく科学技術の神学）と、その基礎論として自然神学（伝統的自然神学の再考）

2. 思想史のアプローチ：キリスト教思想史の近代以降の文脈

宗教と科学の対立論から両者の分離論を経て対話・再統合論へいたる展開

3. 18 世紀以降の思想状況：啓蒙思想と、新しい思想動向に敏感な教養市民層の存在。

・啓蒙思想＝複合的な思想運動。

理神論から異端的宗教論や懐疑論、そして宗教批判（無神論あるいは唯物論）。

しかし、単純に反宗教思想であるわけではなく、ニュートン主義の自然神学まで。

・近代科学も含めた新思想に敏感な知的エリート層。

↓

理神論、自然神学、自然主義、歴史主義といった思想動向。

近代以降の宗教と科学の関係をめぐる議論において重要な論点。

・18 世紀以降に顕著な傾向として、生命現象が論争の中心的な争点を形成すること。

レイ『創造のみ業に顕れた神の知恵』（1691 年）から、ペイリー『自然神学』（1802 年）への自然神学の展開過程 → 19 世紀後半の進化論論争

生物学が生命現象を対象とする近代科学として成立するプロセスと宗教と科学との関係論争との並行関係。

4. 近代初頭、ケプラーからニュートンに時期に天文学や物理学

20 世紀の科学的な心理学の登場、心的現象を問題の争点へ、近年の脳神経科学

↓

キリスト教思想における科学技術論（「宗教と科学」関係論に基づく科学技術の神学）

は、科学技術の進展に伴う新しい問題状況において、繰り返し再構築される必要がある。

5. 20 世紀のキリスト教的科学技術論はどのような仕方現代の問題状況に至ったのか、その中で今どのような思想的探求がなされつつあるのか。

20 世紀の前半から中頃を代表するティリッヒと、ティリッヒに続く世代を代表するモルトマンとを取り上げる。

**A. 前期ティリッヒの科学論：分離論への移行**

6. プロテスタント・キリスト教神学：第一世界大戦の前後

19 世紀的な神学からの訣別を宣言した弁証法神学の登場＝現代神学の開始。

宗教と科学の関係論：19 世紀後半の宗教と科学の対立図式から次の段階へ。

## 7. 前期ティリッヒにおける科学論

「文化の神学」(Kulturtheologie)：科学論と宗教社会主義

宗教と文化の分裂状況（他律と自律の対立）・二重真理論の克服。

近代の自律的理性に合致した真理とキリスト教的伝統の信仰的真理を克服する  
「この二重性はどんなことがあっても廃棄されねばならない。それは、意識にのぼるやいなや耐え難いものとなる。なぜなら、それは意識を破壊するからである。」(Tillich, 1919, S.74)

8. 宗教哲学、宗教の精神史、宗教の規範的体系論。「認識そのものが、認識の体系を構築するように要求」(Tillich, 1923, S.116)。

「諸学の体系は精神諸機能の体系の表現となり、また精神の構造は、諸学が諸対象を見出し境界づける際の多様な方向性から認識可能になる。」(ibid., S.117)

## 9. 認識行為の現象学的分析→諸学の体系：

諸学における認識行為、認識の心的内容などの実体化を中断し（自然的態度のエポケー一）、純粹意識の領野における志向相関を直観的に確保しつつ記述

三つの原理

思惟(Denken)と存在(Sein)という認識行為を構成する本質的要素（認識の原理）

第三の要素として精神（認識行為自体についての認識。認識の自己参照性）

①思惟科学、ないしは観念的な諸科学：論理学、数学、現象学

②存在科学、ないしは実在的な諸科学：実在の三つの種類としての法則、形態、系列

(1)法則科学：数理物理学、力学、動力学、化学、鉱物学

(2)形態科学：有機的諸科学：生物学、心理学、社会学

技術的諸科学：医学、教育学、社会経済学、統計学

(3)継起科学：歴史学（政治史、伝記、文化史）、人類学、記述民族学、言語学、文献学

③精神科学ないしは規範的な諸科学：哲学、倫理学、神学、形而上学、政治学、国家論

## 10. 神学の科学性：

諸学体系内の精神科学に属する一科学としての固有の専門領域と科学性。

神学の神律的という精神的態度に基づく科学性。

## 11. 意味論：意味の形式、意味は意味連関である。

意味の内実。意味連関の意味。言語体系の全体は、言語共同体の基本的な実在理解に依存し、歴史性を帯びている。

「形式-内実」(Form-Gehalt)という対概念にもとづく意味論。

12. 「現実の体系が構築されるところにおいては、形式の内に、単なる形式以上のものが顕わになる。この体系の生きた力が体系の内実であり、体系の創造的な立場、根源的直観なのである。あらゆる体系は、それを根拠づけ構築する原理によって活力が与えられている。しかし、すべての究極原理は究極的な現実直観、根源的な生の態度の表現である。内実が、諸学の形式的体系を通して、あらゆる瞬間に現れ出る。それは形而上学的であり、すなわち個々の形式や諸形式全体を超えている。……形而上学的ものは体系の生きた力、意味、血液なのである。」(ibid., S.118)

## 13. 意味論の射程→人間存在の包括的な理解。

- ・意味の実存性：主観
- ・意味の形式性：客観
- ・意味の共同性：相互主観

限界：非ロゴス的な契機（欲望、身体）、意味への固執するという問題

14. 19世紀的な科学論に基づく神学の科学性の議論は諸学の体系内部での神学と諸学との相互関連を明らかにすることで、神学と諸科学との対立を回避する試みである。20世紀的な問題意識を共有してなされた神学についての議論は、神律的な学としての神学と自律的な学としての諸科学との原理的な区別によって、神学と諸科学との対立を一挙に根底から解決しようとする試みと解することができる。

## B. 後期ティリッヒの科学論、分離論から対話論へ

15. 1950年代の後期著作、『組織神学』全三巻（1951～63年）における科学論

16. 「相関の方法」(method of correlation)による神学体系の構築。

相関の方法は、人間の状況が内包する問いに対する答えとしてキリスト教的メッセージを解釈し相関させる。

前期の思索から一貫するキリスト教のメッセージの真理性あるいは有意味性を時代の思想状況の中で提示するという弁証的意図。この相関をめぐる神学と哲学の関連性。

17. 「人間の状況の分析は、文化の全領域における人間の創造的な自己解釈によって利用可能とされた素材を用いる。……神学者はキリスト教のメッセージによって与えられる答えとの関係で、これらの素材を組織化するのである。このメッセージに照らして、神学者はたいていの哲学者が行うよりも、透徹した実存の分析を行うかもしれない。それにもかかわらず、それはなおも哲学的分析なのである。実存に含意された問いを展開しつつ、実存を分析することは、哲学的課題である。たとえ、それが神学者によって遂行され、またそれがカルヴァンのような宗教改革者であったとしても、そうなのである。」(Tillich, 1951, 63)

18. 後期ティリッヒでは、哲学は相関の方法の文脈において、状況が内包する問いの定式化という役割を担う。哲学に諸科学に対する、いわば特権的位置を与える。

「科学的探究と神学との間の接点とは、科学と神学の両者における哲学的要素のなかにある。それゆえ、神学の特殊な科学に対する関係の問いは、神学と哲学の関係の問いに統合されることになる。」(ibid., 18)

19. 相関の方法における哲学：問いの定式化のみならず、答えの定式化にも関わっている。

キリスト教のメッセージを状況の問いに対する答え「として」解釈する＝哲学的解釈学的作業。キリスト教思想の科学性がこの解釈学的構造において具体化される。

↓

宗教と科学の関係論の詳細は、哲学的要素の分析、特に哲学と神学との関係の分析を要求することになる。宗教と科学の対立は、宗教と哲学の対立に収斂する。

20. 「対立は戦いが行われる共通基盤(common basis)を前提にする。しかし、神学と哲学の間には共通基盤は存在しない。……哲学的レベルでの対立は、二つの哲学者の間の対立であり、その内一人がたまたま神学者であっただけであり、それは神学と哲学の間の対立ではない。」(ibid., 26)

21. 共通基盤が存在しない→神学と哲学との間に対立はない→神学と諸科学の間にも対立は起こりえない。 cf. 前期の科学論における神律的な学と自律的な学との根本的区別。

対立は逸脱に基づく。擬似的対立

22. 対立だけでなく対話も成立しない。→分離論

23. 共通基盤と区別される共通根拠(common ground)。

「問いの答えるためには、その人は問いを發する人間となにか共通なものを持っているの

でなければならない。漠然とした言い方になるかもしれないが、弁証神学者は共通根拠を前提しているのである。」(ibid., 6)

24. 問いと答えが相関するために必要な共通の何か、この共通根拠こそが神学と哲学との関連性、そして神学と諸科学との関係性を可能にする。しかし、共通根拠の問いは課題として残されている。

ティリッヒは基本的に分離論の立場をとっており、この共通根拠についての議論を深める必要性を十分に意識していない。

後期ティリッヒ：1950年代後半から始まり『組織神学』第三巻に結実する次元論。

25. 晩年期のティリッヒにおける宗教と科学の関係論の新しい展開。

「なぜなら、科学にはもう一つの要素が存在するからである。それは、人間の精神的生の全体に、それゆえ宇宙における人間の自己解釈に、科学が参与していることである。かつて、このような神話論的また形而上学的な言葉における自己解釈から、科学は生まれてきたのである。この発展のどの段階においても、科学はその根拠を完全に捨て去ることはなかった。科学自体が宗教的次元に到達するのは、この点においてである。」(Tillich, 1960, 155)

26. 科学自体の宗教的次元＝共通根拠。→意味論（意味の形而上学）の再考

神学と哲学との、あるいは神学と諸科学との対話で問われるのは、「宇宙における人間の自己解釈」「人間の精神的生の全体性」への参与であること。

→ 神学と諸科学の共通課題が共通根拠を具体化する。環境あるいは平和・・・

27. 宗教と科学の関係論をめぐる晩年のティリッヒの展望（再統合あるいは協力の希望）。

「今、これはわたしを最後の地点へと導く。そして、わたしは次のように語ることによって総括したい。宗教、科学、哲学の間の対立の時代は、原理的に過ぎ去った。もっとも、思想のより古い時代に逆戻りしている個々人はまだ存在しているけれども。わたしたちは寛容の時代に生きているのだ。これは決して満足できるものではない。というのも、それは相互に認め合うが結合しないからである。……そこで、われわれは常に再統合を、この場合は、協力を求めている。そして、これが今日可能なのである。これは多くの場所で始まっており、わたしは、それがますます力ある現実になるかもしれないという希望を表明したい。」(Tillich, 1963, 172)

#### <参考文献>

Tillich(1919) : Über die Idee einer Theologie der Kultur, in: *Paul Tillich. Main Works* vol.2, de Gruyter, 1990, S.69-85.

(1923) : *Das System der Wissenschaften nach Gegenständen und Methoden*, in: *Paul Tillich. Main Works* vol.1, de Gruyter,1989, S.113-263.

(1951) : *Systematic Theology* vol.1, The University of Chicago Press.

(1960) : *The Relationship Today between Science and Religion*, in: J.Mark Thomas(ed.), *Paul Tillich. The Spiritual Situation in Our Technical Society*, Mercer University Press, 1989, pp.151-158.

(1963) : *Religion, Science, and Philosophy*, in *ibid.*, pp.159-172.

Torrance(1962) : T.F.Torrance, *Karl Barth. An Introduction to His Early Theology 1910-1931*, SCM Press.

芦名(1995) : 芦名定道『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社。